

不注意・衝動性のある自閉症児に対する適切な行動形成への取り組み

—ルールを守り地域で落ち着いて活動を楽しむことを目指して—

国立秩父学園 蔦森 英史 栢上耕祐 金森孝之 伊藤隆 永吉敏広 高木晶子

1. はじめに：自閉症と診断される人の中で、不注意や衝動性といった行動傾向をもつ場合、対応が困難になる(服巻ら,2005)。服巻らは作業所で働く自閉青年で衝動的行動により作業の逸脱が顕著だった事例が、先行刺激操作と結果操作の介入によって、逸脱回数が減少したことを報告した。本報告では地域で活動する機会が多いがその際不適切行動が顕著である A さんに対し、親のニーズを受けて、ルールを守った上で活動を楽しめるよう支援した経過を報告する。

2. 目的：不注意・衝動性のある自閉症児に対する、適切な行動形成のための支援方法の検討。

3. プロフィール：A さん 17 歳、男性。診断名：知的障害 自閉症。服薬：なし。行動特徴：文字で書かれたスケジュールを理解することができ、見通しが持てると比較的安心して行動ができる。テレビ雑誌やスポーツ雑誌を好み、本屋や図書館へ行くことを楽しみにしている。一方好きな物を前にすると興奮して衝動的な走りだし、声だし、時間になっても雑誌等の閲覧をやめられないといった不適切行動が顕著になり、制止も効きづらくなる。

4. 分析方法：1) ベースラインの設定：特別な準備なしで本屋へ行き、その時の A さんの行動をベースラインとした。2) 不適切行動の定義：ベースライン時に顕著に見られた行動として、【走り出し】、【声だし】、【終われない】があり、これらを「不適切行動」と定義した。3) 記録方法：①入店直後～雑誌コーナーへの移動②雑誌コーナー～レジへの移動③レジから店外への移動、の三つに場面を区切り、それぞれ 1/0 サンプリング法にて不適切行動の記録を行った。

5. 支援方法及び結果と評価 **第Ⅰ期 15 歳(X 年 9 月 29 日～11 月 16 日)** (1) 支援方法：[先行刺激操作 わかりやすいルールの提示] 守るべきルールを視覚的に分かりやすく作成し、出発前の自室、及び店の前でそれぞれルールを確認した。店内では 10 分間自由に雑誌を閲覧してもらった。(※守るべきルール：①お店の中では静かに②お店の中では走りません③タイマーが鳴ったらレジへ行く) (2) 結果と評価：ベースライン期に比べ、走り出し、声だしは減少したが、時間になっても終わることが難しかった。

第Ⅱ期(X 年 11 月 27 日～12 月 19 日) (1) 支援方法：第Ⅰ期の支援に加え、以下の支援を行った。[不適切行動に対する即時フィードバック] イエローカードを作成し、店内で不適切行動があった場合に、即座に本人にフィードバックをし、適切な行動への修正を促した。(2) 結果と評価：すべての不適切行動が増加した。好きな物を前にして、早く見たい、沢山見たい気持ちが強く、それに強くブレーキをかけるように過剰な介入をすることで逆に衝動的行動が増加したと考えられた。

第Ⅲ期(X+1 年 1 月 17 日～2 月 28 日) (1) 支援方法：[本人の気持ちがある程度満たす] 早く見たい気持ちを満たすよう店前でのお約束を中止し、店へ移動中に口頭で約束を確認することとした。またイエローカードの利用を中止し、沢山見たい気持ちを満たすよう閲覧時間を 15 分に延長した。(2) 結

果と評価：走りだし、声だしが減少した。気持ちが満たされると、興奮の程度が下がり、衝動的行動も減少すると考えた。第IV期(X+1年6月21日～X+2年3月28日) (1) 支援方法：

[先行刺激操作及び結果操作] 時間になったら閲覧をやめることが難しかったため、タイマー後の動きのスケジュールを事前に本人にセットしてもらい確認した(先行刺激操作)。活動後自室に戻り、守れた約束には本人に○を付けてもらった。一定の○がたまったら、本人の好きなサッカーカードをプレゼントした(結果操作)。(2) 結果と評価：タイマー後に、自らレジへ向かうことが出来てきた。不適切行動がベースラインより大きく減少した状態が持続した。

6. 考察：先行研究同様、先行刺激操作と結果操作の介入は有効だった。また早く見たい、沢山見たいといった本人の要求を満たすことで、興奮の程度が下がり、その結果走り出しや声だしといった衝動的行動の緩和につながったと考えられた。その後、本屋での声かけも通り易くなりIV期以降の落ち着いた活動に影響していると思われた。以上より適切な行動形成の上で、本人の気持ちの充足も重要な支援の一つであると思われた。

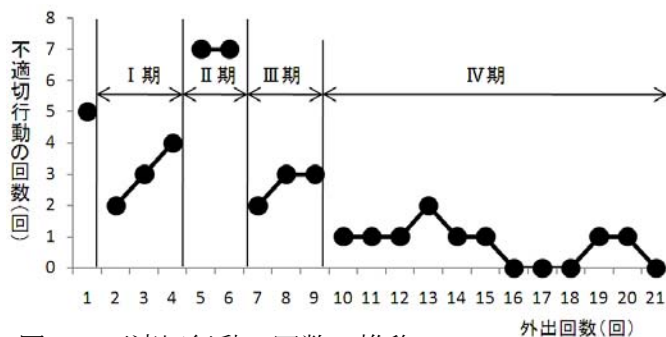


図1. 不適切行動の回数の推移